

環シナ海における近世日越関係史の研究  
(要旨)

広島大学大学院文学部研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D116390

氏名：HUYNH TRONG HIEN (フイン・トロン・ヒエン)

本論文は、当該期のベトナムにおいては二つの政権、すなわち黎鄭政権王朝と阮氏政権が江戸幕府と文書を交換した。ベトナムは日本以外の貿易相手としてはポルトガルをはじめオランダ東インド会社・イギリス東インド会社、中国の私貿易船などがあったが、そのなかオランダ連合東インド会社（Verenigde Oost-Indische Compagnie=VOC）の影響がもっとも大きかったとされている。本稿では日本およびベトナムの史料以外に、これらの当該期のベトナムに絡む貿易関係史料を分析する。当該期のベトナム発ジャンク船の貿易影響および役割について注目して精査したい。

序章では、引用史料および先行研究を整理する。周知の如く、日本における代表的な研究として岩生成一の一連の研究があげられる。氏は朱印船貿易について詳細に研究を行い、安南渡航船数および貿易活動も言及されている。ベトナムを特に対象にした研究としては、オランダ人研究者 W. J. M. Buch ブッフが 1929 年に『広南における東インド会社』を出し、東インド会社（VOC）の広南における貿易活動の状況を分析し、広南（阮氏政権）との関係が良好でなかったことを明らかにした。それから、1986 年にオランダ人研究者 P. W. Klein クレーンがトンキンと日本の間の銀貿易につき、鎖国後から 1700 年までの間、VOC がトンキン生糸を日本に輸出したことを分析した。1992 年には永積洋子が 17 世紀半ばの「トンキン-日本」間の貿易を分析し、Klein の説と重なっているが、1640 年から 1646 年までの間、中国船によってもトンキン生糸が日本に輸入されたと分析した。2007 年にはベトナム人研究者 H. A. Tuán トアンが「トンキン-長崎」間貿易を分析し、Klein と同様に 1670 年には生糸貿易が終わったとしている。

第 1 章では日越関係史の背景にある域内アジア貿易がより拡大されていた。この域内アジア貿易は世界的な規模になった近世期において日越両国の貿易もその枠の中に位置付けられたことを検討した。政治および経済的背景の面では、明朝から清朝へと移り代わる時代を過ごし、さらにオランダ東インド会社および幕府の貿易対策等から、日越両国の関係も影響され変動されつつあったが、ベトナム発ジャンク船によって 18 世紀の後半まで両国の交易は絶えることはなかったと思われるのである。

第 2 章では、光興 14（1591）年閏 3 月 21 日付の広南阮氏から豊臣秀吉宛の書簡があり、広南阮氏が日本との関係を築くつもりであったことを論じた。阮氏が豊臣秀吉に象牙などの産物を贈呈したことが、秀吉の命で文禄元（1592）年に日本の商船を安南に派遣することにつながったと思われる。

江戸時代初期に、広南阮氏および東京の黎鄭政権と徳川家康・秀忠・家光・幕臣らとの間で交わされた書簡が多く残っている。これらの書簡を基に当時の日越両国間の貿易について論じ、徳川幕府が朱印船貿易を制度化した慶長 6 年からの両国間の貿易上の取り決め

や従事者の役割を定めた文書などを分析し、その関係の推移をについて検討した。貿易船は日本からベトナムに航海することがほとんどであり、ベトナム側もさまざまな方法を用いて朱印船商人を誘致したので、ベトナム国内が内戦状態にあるにもかかわらず、日本商人が毎年多数来航することとなった。

朱印船制度によって両国はその信頼性や親密感を増したと思われる。本稿がもっとも明らかにしたかったことは、貿易制度が整備された過程において家康がベトナム商船を招致したことである。また初期段階の両国（阮氏・徳川氏）の関係は対等かつ親密であり、次第に幕府が渡海当事者（本多正純、土井利勝および朱印船商人船本弥七郎）に任せるときからの文面にも変化がみられた。とくに東京鄭氏の交換文書からは一時的に幕府に返書が却下されていたことが明らかになった。鄭氏の家臣からの文面が低姿勢になるとともに、鄭氏と幕府の関係は回復されたが大きな進展はみられなかった。ベトナムの両氏（阮・鄭氏）においては日本からの商船・商品を歓迎する姿勢は鎖国前はもちろん鎖国後も変化はなかった。鎖国後はオランダ東インド会社が東京鄭氏と長崎との貿易間に入り込み、大きな役割を担うことになった。

次に第3章では、近世日越間貿易が展開した時代に、広南阮氏のホイアンに成立した日本人町の角屋七郎兵衛、そして長崎唐通事に所属する東京通事職を世襲的に担っていた魏氏（魏九使の下僕喜の一族）について検討を加えた。

鎖国の後、1660年代ごろから日本人商人角屋七郎兵衛は貿易が一部再開された折に、中国人商船と荒木家を通して安南の商品を日本へ送ることを開始した。彼は17世紀後半の日越交流の仲介役として大きな役割を果たしたといえよう。

七郎兵衛は寛文6（1666）年以前から本国の本家との連絡を再開したと思われ、それから毎年安南から品物および銀子を長崎に送っていた。この時、鎖国体制下の長崎の対外貿易は、幕府の規制が加わらない相対自由売買商法であったうえに、外国に在留している日本人が親族との書簡などをやり取りすることも許されていたのであった。

七郎兵衛の品物等は寛文11年までは荒木家の勘左衛門と久右衛門が代官の前で代理として商品を受取っていたが、寛文11年からは幕府はこういった代理を認めなくなった。そこで七郎兵衛は息子呉順官をホイアンから長崎へ行かせたが、七郎兵衛のその後の注文品は生活用品が主となり、商売は小規模となっていた。七郎兵衛が亡くなった後、呉順官は長崎貿易を継承し、七郎兵衛生前からの五娘および夥長（＝水先案内人）の助けを受けながら貿易を行った。

七郎兵衛にとって松本家一族への思いは絶えがたく、彼はホイアンに松本寺を建立した。寺の建立にあたって「額之覚」などが残っており、日本町の位置を想定できる貴重な史料

となっている。彼は商売の傍ら長崎の清水寺・大音寺等だけでなく、長崎から遠い伊勢松坂の来迎寺にも金品を奉納している。また日本にいる知り合いが不幸に遇った際にも銀を送っている。

七郎兵衛関係史料に基づくと、鎖国の後 30 年ほどしてから本家との連絡が再開され、連絡する度に商品も送られた。これは中国船を利用して送られたものであるが、長崎では荒木氏の兄弟と本家の兄弟がそれぞれの役割を果たしていた。それに、日本固有の「投銀」活動、すなわち投資活動を図っていたことも知られている。数年でこういった貿易は終焉を迎えることになったが、当時の両国間の商人レベルの文書から、その物（商品・文書）を通じた交流があったことが知られる。また、七郎兵衛の寡婦の亡夫に対する愛情、本家への関心、家業への心配等がうかがえた。政府レベルの交流のみならず、物を通して人の考え（文化）を分かち合うような庶民間の交流もあったことは近世期の日越交流史の大きな特徴である。

長崎では明暦年間に唐通事に所属する東京通事が設立され、東京久蔵という人物がその役割に就いた。また、上記の七郎兵衛とも関係をもった魏九使が寛文 12（1672）年に東京生まれの下僕「喜」を連れて長崎に在住することになり、東京久蔵と東京通事を担った。「喜」はのち、魏氏の姓を名乗り、久蔵の死後、東京通事を世襲することになった。ただ魏氏の仕事の内容は、ベトナム（東京・広南）から漂着した商船や遭難民に対しての通訳のみで、長崎に来航したベトナム発商船から風説（事情）を聴く役割はほとんど唐通事によったものと思われる。時代がたつにつれて、漂流船の数も減少していき、東京通事の給与も徐々に削減されていった。東京通事の名は 1860 年代まで残るが、事実上その活動はほとんど見られない。

第 4 章では、近世期における日越貿易関係が、朱印船貿易時代の終焉後から VOC という仲介者によってのみ継続されたのではなく、ベトナム発ジャンク船（東京発、広南発）の活動も大きかったことを論じた。

17 世紀後半（朱印船時代後）から 18 世紀後半までの記録によれば、ベトナム発ジャンク船（広南発ジャンク船が圧倒的に多かった）は東京のみ活動を行った VOC と同じかあるいはそれ以上の商品等を長崎に運んでいったことがうかがえる。すなわち、東京商館の衰退した 1670 年代の後も、このベトナム発ジャンク船の活動は継続したのであった。

18 世紀初頭の日本による貿易制限政策のため貿易量は減少するが、それでもベトナムからのジャンク船は毎年多量の商品を積んで長崎へ向かった。これはベトナム商品が日本において需要があったからであろう。また、この時期の日越貿易では、ベトナムに貿易拠点（とくに広南）を置くベトナム発のジャンク船が日越間貿易に占める役割が大きかったと

いえよう。

日越間貿易における輸出輸入品量の分析によれば、17世紀の前半の「広南—長崎」間の貿易の担い手は主に朱印船であり、その主力商品は日本からは銀と銅、ベトナムからは生糸と絹織物であった。オランダ船の「東京—長崎」間貿易の商品は主に生糸と絹織物であったが、ベトナム発ジャンク船の「広南・東京—長崎」間貿易においては様々な商品、とくに砂糖、胡椒、肉桂、鹿・鮫皮が長崎まで運ばれた。1660年代には生糸貿易の衰退のため、日本からの別の商品であった銅銭がオランダ船によって東京に運ばれ、東京での銭不足状況を解決したといわれてきたが、それ以前から広南および東京に輸入された銅の量は決して少なくなかった。1610年代にはイギリス商船、1620年代から1630年代にはオランダ船が広南に、それからベトナム発ジャンク船も銅を広南に輸入していたことが確認できる。また、実際に銅がオランダ船によって輸入される前の時点で、ポルトガル船および中国船が銅を大量に運んだため、広南・東京における銅銭不足の状況は解決されつつあったと思われる。実際、銀銅の為替レートは1660年代の前半にはすでに1640年代の時点に戻っていた。そのため、1670年代初めに銅銭の値が安くなり、オランダ船の銅貿易の利益は激減し、数年後にこの銅貿易は終焉となった。

1670年代になってオランダ船の東京貿易にほとんど展望が開けない時期に、ベトナム発ジャンク船は上記の生糸のほかに、砂糖、胡椒、肉桂、沈香、鹿・鮫皮を大量に長崎に運んでいった。18世紀のデータは乏しいが、数量が判明している20ヶ年の年平均の商品の数量は決して少なくない。このようにベトナム発ジャンク船の活躍は否定できず、日越間貿易はこうした形で少なくとも17世紀の末まで維持されたといえよう。さらに18世紀の日本における貿易制限令のために、ベトナムから長崎に来航する船は年平均1、2隻になり、貿易全体が衰退したといわざるをえない状態になったが、それでも細々と日越間貿易少なくとも18世紀後半までは続いたと思われる。